

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第7回 第3.2.2節

2018年4月1日

小田 勝

「3.2.2 XはYなり」のあとに、森山卓郎（1989）を参考にして、節を新設する。

## 3.2.2' XはXなり(新設)

名詞述語文の主語と述語に同じ名詞を置いた表現形式を「自同表現」という。これには、A「属性表示型」と、B「排他型」との2つのタイプがある（森山卓郎 1989）。

A「属性表示型」は、2つの同じ名詞のうち、最初の名詞（以下「前項」と呼ぶ）が個体を、2番目の名詞（以下「後項」と呼ぶ）がその属性を表すものである。名詞は主語に用いられると個体を、述語に用いられると属性を表示しやすいので（野村剛史 1993、小柳智一 2003b 参照）、自同表現は、このタイプが最も普通であるといえる。この「属性表示型」は、後項の表す属性の質によって、2つに分けられる。まず、[A1] 後項が「本来の性質」を表すもの。「君はやはり君だ」などの類である。

- (1) わが身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれする（＝トボケテイル）君は君なり（＝昔ノママノ君デアル）（源・若菜下）

次に、[A2] 後項が「プロトタイプとしての属性」を表すもの。「こんな写真は写真ではない（＝写真性を十分に満たしていない）」などの類である。

- (2) 注連のうちの花は花にもあらぬなりけり（栄花 31）

(2)の後項は「完全な…」のような意であるが、後項が、「普通の…」 「並の…」 「単なる…」 の意を表すものもある。

- (3) この所の風景、さらに風景（＝並ノ風景）にあらず。すこぶる神仙逍遙の地とおぼえ侍る。（廻国雑記）

B「排他型」もまた、2つのタイプに分けられる。まず、[B1] その事物以外の何物でもないを確認するもの（「君は君、僕は僕」などの類）。

- (4) 君は君 我は我とも隔てねば心々にあらんものかは（和泉式部集）  
(5) 我は我と〔紫上ハ源氏ニ〕うち背きながめて（源・滯標）

(6) 身の憂さを嘆くにませて(他本「つけて」) 忍べども恋は恋とや分きて見ゆらん(頼政集)

(7) あさ霜はここら置けども白菊の久しくにほふ花は花かな(経信集)

次に、[B2] 一旦その事物の存在を認めつつ、話し手の本意は別のところにあることを示すもの(「それはそれ(として)」などの類)である。

(8) いかにかせむ常のつらさはつらさにていましほのさらに添ふころ(風雅 1268)

(9) 女、石と瓦とを包みて、「我が仲はこれとこれとに(=石ト瓦ニ)なりにけり頼むと[別レノ]憂きといづれまされり」、返し、本院にこそ。

これはこれ 石と石との仲は仲頼むはあはれ憂きはわりなし(一条摂政御集)

◆(8)について、次のような句型もある((8)を「つらさはつらけれど」にした形)。

・尊さはいと尊けれど、いと悲しくなむ。(多武峰少将物語)

---

「XもXなり」についても、「XはXなり」とは異なる表現性があるようで、十分な研究が望まれる。

・空も空月も夜頃の(=夜中ノ)月なれど今宵になれば光ことなり(散木奇歌集)〈詞書「八月十五夜遍照寺にして月翫といふことを詠める」〉

・主も主 所も所たとふべきかたもなぎさに寄する白波(散木奇歌集)〈詞書「仏まことに妙に安らかなる国におはしますといへることを詠める」〉

・今日も今日 菖蒲も菖蒲変わらぬに宿こそありし宿とおぼえね(後拾遺 213)

・秋も秋今宵も今宵月も月所も所見る君も君(後拾遺 265)

なお、述語部分に同語を置いた、「Xは、YにてYにあらず」のような表現形式もある。

・道の駿するにつきて(=修行ガ進ムニツレテ)出で来る御心遣ひ(=御研究心)なれば、これら(=相伝ノナイ譜ヲ演奏スルコト)は難にて難にあらざるべし(=一般的ニハ難点デアッテモ、必ズシモ難点デハナイダロウ)。(文机談)

[出典追加] 廻国雑記①道興(1430-1488)②1486-87年の記事③中世日記紀行文学全評釈集成7

[引用文献追加] 小柳智一 2003b「名詞の論」『国語研究』67/野村剛史 1993「上代語のノとガについて(上・下)」『国語国文』62-2,3/森山卓郎 1989「自同表現をめぐって」『待兼山論叢』23